

ニッポン

ドクター和の



臨終図巻

「長尾さんは本を出し過ぎです」

「こつたしなめられることがあるのですが、このお方と比べたら私の著作なんて微々たるものです。」

著作の累計発行部数1億1500万部。浅見光彦シリーズだけでも9700万部。人気作家の内田康夫さんが3月13日に東京都内で亡くなりました。83歳でした。

2015年夏、軽い脳梗塞となり入院。その後、休筆宣言されましたが、妻で作家の早坂真紀さんと「夫婦短歌」というホームページ(H.P.)を立ち上げました。

「療養中ということ」

47 内田康夫



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京大学第一医科大学卒業後、大阪第二医科大学第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「葉のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

夫婦愛あふれた最終章

にはいきませんからね。それまではカミさんに協力してもらって、短歌を詠む……」
病を機に、より濃密な夫婦関係を築かれていったように思えます。
「あと一度 一度でいいから抱きしめて 片手でなくて両手で強く」という昨春の早坂さんの歌からは、内田さんの半身が麻痺されていたこともうかがえます。
二人三脚のリハビリを続けながらも、内田さんはゆっくりと人生の最終章を歩まれたようです。報道によれば死因は「敗血症」。みなさんも、新聞の計報記事でこの病名をとさどき見かけることでしょう。

高齢や病気によって免疫機能が弱り、感染症をきっかけとしてさまざまな臓器が機能不全に陥る状態を「敗血症」と呼びます。肺炎やがん
で入院し、治療の末に病院などで亡くなった場合、死亡診断書にこう書かれることは少なくありません。日本集中治療医学会によると、年間約10万人が敗血症によって死亡しています。
進行すると、血圧低下や呼吸不全、腎不全、肝不全など、さまざまな症状が現れるため、輸液や人工呼吸器、血液濾過透析などの全身管理を集中治療室で行うケースが多々あります。
しかし、あきらかに終末期と思われる方が敗血症を起こした場合、どこまで治療をするべきかは、悩ましいところです。
短歌によるリハビリが功を奏したのでしょう。内田さんの頭脳は最期まで明晰であったようです。先のHPには、亡くなる1カ月前の2月15日付で、内田さんのこんな短歌が。
「助手席に 妻座らせて 下り坂 プレーキ踏みし 夢の切なく」
夫婦愛あふれた人生の下り坂でした。